

その写真，小児科フォローアップ中の1型糖尿病患児13名の選択している組み合わせ，それぞれ組み合わせによる診療報酬算定を紹介する。

17. 当科における乳児血管腫に対するプロプラノロール内服療法について

形成外科

○高田 温行 秋田美由紀
最所 裕司

乳児血管腫は，赤色または紫色調で過形成性かつ隆起性の血管性病変であり，生後1年以内に出現する。大半は自然退縮するが，視覚，気道，その他の構造が障害される場合には治療が必要である。（MSDマニュアル参照）

以前はいちご状血管腫と呼ばれていたものであり，その消退する特性から経過観察の適応とされ，また，症例によってはLASER治療が行われてきた。2016年に乳児血管腫に対してのプロプラノロール内服が承認され，3年が経過する。当院でも少数ではあるが症例を選びプロプラノロール内服療法を開始し，良好な結果を得ている。当院でのクリニカルパスを用いた内服療法と症例を報告する。

18. 大動脈人工弁破壊を来したリステリア敗血症の1例

- 1) 内科 2) 循環器内科
3) 心臓血管外科

○吉田 啓太¹⁾ 中村進一郎¹⁾
山本 岳玄¹⁾ 多田 俊史¹⁾
藤尾 栄起²⁾ 毛利 亮³⁾
森井 和彦¹⁾ 奥新 浩晃¹⁾

【症例】87歳女性【主訴】腹部膨満感【現病歴】非代償性肝硬変で近医通院中に腹水と肝の占拠性病変を指摘され，当院を受診した。【既往歴】大動脈弁狭窄症（人工弁置換術後）【経過】中等量以上の腹水を認めコントロール目的に入院し，トルバプタン内服を開始した。入院日に39度台の発熱と翌朝に血圧低下を認め，血液培養で *Listeria monocytogenes* (Lm) が検出され敗

血症と診断した。ABPC/SBT投与2日目に心雑音と喘鳴が出現した。心エコーで大動脈人工弁輪縫着部に血液の逆流を認めた。感染性心内膜炎と診断したが，Child-Pugh score 12点で手術適応なく，抗生剤加療とした。多臓器不全で入院49日目に死亡した。【考察】Lm感染のリスクに高齢，担癌状態と非代償性肝硬変がある。経口感染が疑われ，腸管から移行し人工弁に感染したと考えた。

19. 入院前転院予約システムの取り組み

地域医療連携課

細岡明喜子 河南 孝子
前田 智成 太田 加代

厚労省は「医療費適正化計画」などを打ち出し，在院日数の短縮化が促進されている。整形外科でTHA（人工股関節全置換術）とTKA（人工膝関節全置換術）のクリティカルパスを3週間から2週間に短縮するにあたり，転院患者が増える事が予測された。PFM機能を有効に活用し，入院前から転院先を決定することにより，スムーズな退院支援ができると仮説を立て取り組みを検討し，2018年11月から「入院前転院予約システム」（以下，システム）の運用を開始した。

現在18医療機関と契約を交わし，スムーズな退院調整に院内外から好評を得ている。運用開始前の地域連携・院内連携の取り組みや，運用後の効果について検証した。

今回システムの導入で，早期に調整を開始することにより，病病連携として双方の機能を活かし効率的な病床運用が可能となった。また急性期病院としての役割を明確にしつつ，患者・家族の意思決定をしっかりと支援し，チーム医療の推進，病病連携強化に貢献できている。今後更なるシステムの充実を図りたい。

20. 平均在院日数短縮に向けた取り組み

ー人工股関節全置換術のクリニカルパス改訂を通してー

看護部

○船曳 幸代 横田裕美子

三木 幸代

医療社会事業部

前田 智成 田中久美子

整形外科の年間手術件数は800件を超え、人工股関節全置換術（以下THA）と人工膝関節全置換術（以下TKA）を合わせて、手術全体の25%を占めている。THAとTKAのクリニカルパス全入院期間は22～24日の設定であった。他施設では15日前後のところもあり、クリニカルパスの入院期間の設定が、5階東病棟の平均在院日数を延長している要因の1つだと考えた。地域包括ケアシステムが推進されているなか、多職種連携を強化し、患者満足とQOLの向上を支援しつつ、平均在院日数の短縮を図る方法を検討した。

①THAクリニカルパスの改訂②入院前転院予約システムの導入③リハビリ転院先への施設訪問を実施し、業務改善に取り組んだ。その結果、病棟稼働率は平均96%を維持しつつ、THAの平均在院日数は4.4日、部署平均在院日数は2.9日短縮した。転院患者割合は前年度8.5%から54.4%と大幅に増加し、DPCⅡ期間内での退院割合は、35.6%から92.2%へ増加した。多職種連携から、地域連携へ視野を広げた看護管理実践が、今後さらに必要だと考える。

21. 診療情報管理士が見たがんゲノム医療の実際

がん診療連携課

安東 正子 藤田 裕子

伊藤 絢子 安井 典子

嶋屋 智子 内 幸恵

山根美代子 井上 豊子

がん診療連携課は、2018年4月の組織改編により発足した。地域がん診療連携拠点病院（高度型）として指定要件に沿った専門的ながん医療、がん患者・家族に対する相談支援、情報提供等を円滑に実施できるよう援助する役割を担っている。

また当課は、2018年2月に立ち上がったゲノムカウンセリング室の事務局として岡山大学病院と連携を取りながら院内システムの準備を進め、2019年9月より、保険診療によるがんゲノム医療を開始した。

2019年12月末までの実績は、エキスパートパネル8件、うち治験の提案があったものが4件であった。

エキスパートパネルを実施する症例は、国立がん研究センターがんゲノム情報管理センターC-CATシステムへのデータ提出が義務付けられる。診療情報管理士として登録業務を担当しているが、患者への説明方法やタイミング、診療報酬について等、様々な問題点も見えてきた。

間近で見たがんゲノム医療の実際を通して、現況を報告したい。

22. 化学療法センター看護師が行う診察前問診に対する患者の認識

外来化学療法センター

中村 孝子 山根美代子

福井由紀子

化学療法センターでは、2006年開設当初より自宅での体調変化や生活での困りごと等を確認し、医師と情報共有を行うこと、また患者のセルフケア支援を行うことを目的として化学療法センター看護師が問診票を活用し面談で診察前問診を行っている。今回、患者が診察前問診についてどのように感じているかを明らかにするため、2019年2月1日～28日の期間、化学療法センターで治療を受けている患者332名を対象に、自記式質問紙調査を実施し、質的帰納的に分析したので結果を報告する。